

京極読書新聞

<第82号>

発行日 平成28年9月1日(木)
京極町生涯学習センター湧学館



充実の北コレクション 京極町を取り巻く全「市町村史」が集結中！

現在、京極町役場で保管していた後志の各「市町村史」が湧学館に移動中です。利用者の人たちにとって、いっそう手に取りやすい場所に置かれることになりました。京極のことを調べるには『京極町史』一冊があれば事足りるということはありません。例えば、入植から120年の今年、京極町（昔の東倶知安村）独立の引き金となった「山梨団体の集団移住」を調べるとしたら、『京極町史』の他に『倶知安町史』や『喜茂別町史』『豊浦町史』『赤井川村史』などが必要となります。

今まででしたら、関連の各町村図書館を自力でまわるか、あるいは、これらの町村史が全部揃っている北海道立図書館などへ足を運ばねばなりません。でも、これからはちがいます。湧学館に行けばいいんです。地図に名前が出ている市町村の新旧の市町村史がすべて揃っています。例えば、『ニセコ町史』はもちろん、湧学館は『狩太町史』まで所蔵しています。しかも、これらの市町村史、借りられます！

たいていの図書館では、市町村史は貴重な郷土資料ということで「館内閲覧のみ」「貸出禁止」の処置がとられます。ですが、理由は今となってはよくわからないのですが、湧学館では開館以来、一般書と同じ「貸出可」の処理でやってきました。それで何の問題も起こらなかったのです。今回、大量の市町村史の寄贈を受けてその扱いについて検討しましたが、暫定処置として、湧学館の珍しい特徴「貸出可」でこれからもやってみようと考えているところです。



京極読書新聞は
毎月1日発行予定です

八年目の“黒滝レポート”を終えて

〈『平家物語』を読む会〉 村山功一

8月19日（金）、恒例の“黒滝千織・京都レポート”を開催しました。八年目となる今回は、研究のため北海道を訪れる京都薬科大学の鈴木栄樹教授（日本近代史）と同行しての来訪。こんな機会はめったにないので、鈴木教授にもお話ししていただくことにしました。当日のスケジュールは以下のとおり。

第一部

「〈『平家物語』を読む会〉と私
——第一回から第七回を振り返る——」
黒滝 千織さん

第二部

「北垣国道を通して見た京都と北海道」
鈴木 栄樹教授

第一部では、インフルエンザの流行により、湧学館での開催が出来なくなり“幻のレポートとなった第一回から、アンケートを行って黒滝さんの友人、知人、恩人（？）…の諸氏、諸兄を困らせた（私としては、大成功なのですが）”昨年の第七回までを振り返りました。各回毎に使用した映像を見つつ、軽快かつテンポのよいトークで会場を沸かせてくれました。

第二部は幕末の動乱を経て明治14年第三代京都府知事、明治25年第四代北海道長官、明治32年北海道鉄道会社社長などの要職を歴任した北垣国道についての講話。北垣が残した日記『塵海』の解説、研究に直接携わる鈴木教授のお話を聞いたことは、貴重な経験でした。京都府知事時代琵琶湖疎水事業に着手し、維新後の京都に急速な近代化をもたらした北垣の眼をとおしてみた北海道開発は、インフラの整備と産業形態の近代化こそが何よりも急務と映ったのでしょ。私たちの知らない黎明期の北海道の姿を、京都の鈴木教授からお伺い出来たことは、興味深いことでした。また、『平家』的世界とは全く異なる日本近代史に触れたことも新鮮に感じられました。こうした機会を作ってくれた黒滝さんに感謝です。

最後になりましたが、例年のことながらご協力いただいた高橋教育長、山田生涯学習課長そして具体的な調整、準備にあられた新谷さんはじめ図書館の皆さんにお礼申し上げます。ありがとうございます。



■北垣国道とは

ここで、今回私が知りえた北垣国道について、少しまとめておきたいと思います。

北垣国道（かたがき・くにみち）

幼名 晋太郎 号 静屋（せいおく）

<天保7（1836）年～大正6（1916）年> 但馬（現・兵庫県）の人



北垣国道 1836-1916

28歳のとき、尊皇攘夷派志士による倒幕運動“生野の変”に参加。計画失敗の後、柴捨蔵と変名し長州藩に逃亡潜伏する。戊辰戦争には鳥取藩士（官軍）として従軍、戦功を挙げる。戦後、明治新政府の官僚となる。

明治14（1881）年、第三代京都府知事に就任。在任11年の間、数々の功績を重ねるが、特に、琵琶湖の湖水を京都に引き入れる“琵琶湖疎水”事業の着手完成は、最大の成果であった。当初は水運のため、後には水力発電、水道へと発展。幕末動乱による荒廃、東京遷都による混乱期の京都を、急速に近代化させた。その手腕はやがて北海道でも発揮される。

北垣と北海道の関わりは深く、早くも明治2（1869）年弾正大巡察として函館・樺太を視察している。明治6（1873）年、開拓使浦河支庁に在職。そして、京都府知事を経て明治25（1892）年7月、第四代北海道長官に就任する。翌26年には「北海道開拓意見具申書」（北垣十二カ年計画案）を政府に提出し、北海道開発への意欲を示している。

約4年の在職中、北垣が最も重視したのは港湾と鉄道の整備であった。彼の鉄道事業への情熱は、後年官を辞し、民間人として北海道鉄道株式会社社長を務めることから窺うことができる。明治32（1899）年11月のことである。彼の努力は実を結び明治37（1904）年、函館一小樽間が全通する。これに伴って倶知安駅も開設された。同年2月“日露戦争”が勃発する。

ちなみに函館から小樽に向かう石川啄木がく真夜中の倶知安駅に～>と歌を詠んだのは、明治40年函館大火で焼け出され職を求めて札幌に向かう車中の光景である。



進取の気性に富む北垣はその交友関係においても多彩で、古くは坂本龍馬やNHKの大河ドラマ「八重の桜」の主人公八重の兄山本覚馬、八重の夫となる新島襄など、そして北海道では、かつての敵将にあたる榎本武揚とも親交を結んだ。

榎本と北垣は共同して小樽の広大な土地を購入している。この土地の管理、開発は「北辰社」によって行われた。現在の小樽駅近くの繁華街に“静屋（しずや）通り”“梁川（やながわ）通り”という通りがある。北垣の号静屋（せいおく）、榎本の号梁川（りょうせん）にちなんだ名称として今に残っている。

以上、今回の鈴木教授の講話を思い出し、当日配付された資料を読み返して要点をまとめてみました。北海道の開拓と近代化のために多大な貢献をした北垣国道に関して、不覚にも私は殆ど知りませんでした。札幌在住の作家、北国諒星氏はくこれまであまり世に知られ、評価されて来なかった…>と書いています。北海道開拓史において北垣がそれほど（少なくとも一般的には）注目されなかったのは、彼が功に奢らぬ謙虚な人柄であったからではないか、と想像しています。これを機に、偉大で魅力的な“北海道長官”像に迫って見たいと思います。

【参考】

- ・「北垣国道をとおして見た京都と北海道」（配付資料）京都薬科大学教授 鈴木栄樹
- ・『北垣国道の生涯と龍馬の影』北国諒星／北海道出版企画センター（湧学館蔵H289.1キタ）
- ・『小樽商店街の歴史逸話』小樽商店街振興組合連合会・編
- ・『小樽梁川通り』小樽都通り梁川通り商店街振興組合・編

支笏湖・洞爺湖めぐる バスの旅

平成28年10月8日(土) 9:00~17:00



本郷新「叡知の誕生」

受付開始：10月1日(土) 午前10時

申込〆切：10月5日(水)

*定員になり次第終了

定員：19名

参加費：700円

*当日の朝(8:50頃)に集めます

湧学館図書(電話 42-2700)へ
お申込みください

バスの旅・予定コース

◎**湧学館 午前9時出発**～支笏湖ユースホテル(田上義也設計)～支笏湖ビジターセンター～苫小牧市立中央図書館・サンガーデン～本郷新「緑の環」「勇払千人同心」「叡知の誕生」～**昼食/苫小牧・ぷらっとみなと市場(今回は各人ご自由に)**～宮沢賢治・苫小牧修学旅行コース～三星本店～登別・知里幸恵銀のしずく記念館～知里幸恵・知里真志保・金成マツ記念碑～道央道・有珠山SA(宮沢賢治「噴火湾」碑)～洞爺湖・キムンド～水の駅～**湧学館 午後5時頃到着予定**



宮沢賢治「噴火湾」碑



山本一也「碇(アンカー)」

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>

